

# 健康生成モデルにおける汎抵抗資源（GRRs）の分類の妥当性の検討および首尾一貫感覚（SOC）の形成に寄与する GRRs の特定

今井田貴裕・福井義一

## 要約

健康生成論 (Antonovsky, 1979) では、首尾一貫感覚 (Sense of Coherence; SOC) が汎抵抗資源 (General Resistance Resources; GRRs) を動員することで、効果的なストレス対処が可能になると仮定されている。ところが、SOC が心身の健康に及ぼす効果を検討した先行研究は多いのに対して、GRRs についての検討は不十分である。本研究では、Antonovsky (1979) が健康生成モデルで仮定した GRRs の 6 領域の分類の妥当性と、GRRs の各領域が SOC の各下位概念に及ぼす影響について検討した。質問票調査に回答した一般大学生 197 名のデータを使用した。因子分析により、Antonovsky (1979) が仮定した GRRs の分類に近い 5 領域モデルが妥当であると判断された。さらに、構造方程式モデリングによって、GRRs のいくつかの領域は SOC の各下位概念に異なる影響を及ぼすのに対して、それ以外の GRRs はいずれにも影響しないことが分かった。以上から、GRRs の各領域が SOC に及ぼす影響を検討する際には、GRRs の全領域を測定し、互いに他の影響を統制する必要があることが示唆された。

キーワード：健康生成論，健康生成モデル，汎抵抗資源，首尾一貫感覚

## 問題

健康生成論 (salutogenesis) とは、健康を維持・増進する要因の解明を目的とした理論 (Antonovsky, 1979) であり、疾病を維持・増悪する要因の解明を目的とした従来の疾病生成論とは方向性が大きく異なる (朴峠, 2014)。同論は、収容所体験のような過酷なストレスを体験してもなお健康を維持できた人々の観察から見出され、汎抵抗資源 (General Resistance Resources; 以後 GRRs) や首尾一貫感覚 (Sense of Coherence; 以後 SOC) といった重要な概念を提唱してきた (Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001)。しかしながら、これまでの健康生成論の実証的研究は、SOC が心身の健康に及ぼす影響に焦点が当てられる傾向があり、GRRs の役割についての体系的な検討は十分とは言えない。

健康生成モデルにおける GRRs とは、ストレスへの対処に必要なリソースの総称であり、①身体的・生化学的 (Physical and Biochemical)、②物質的 (Artifactual-Material)、③認知・感情的 (Cognitive and Emotional)、④価値態度的 (Valuative-Attitudinal)、⑤対人関係的 (Interpersonal-Relational)、⑥社会文化的 (Macrosociocultural) という 6 つの領域が仮定されている (Antonovsky, 1979)。健康生成論において、SOC が強い人々はストレスに対処するために必要な GRRs を選択して対処できるという方向性があるのに対して、GRRs が SOC を形成したり強化したりするのに寄与するという方向性も想定されている (Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001)。

実際に、ソーシャル・サポート (Antonovsky & Sagy, 1986; Peker, Bernmek, & Uysal, 2012) や夫婦関係 (Daoud, Polsky-Berger, Abu-Kaf, & Sagy, 2015) を対人関係的 GRRs として、自己効力感や自尊感情 (Wiesmann & Hannoeh, 2011)、Big Five の外向性や協調性、勤勉性 (嘉瀬・上野・大石, 2017) を認知・感情的 GRRs としてそれぞれ捉え、SOC に対する正の影響を示した先行研究が散見される。しかしながら、ソーシャル・サポートや夫婦関係は Antonovsky (1979) の対人関係的 GRRs の定義に当てはまるが、自己効力感や自尊感情、Big Five のようなパーソナリティ要因は、どの GRRs の定義にも含まれない。このことから、GRRs の定義や測度について、研究者間でコンセンサスが得られていない現状が伺える。こうした状況も、健康生成論においてもっばら SOC が重要視されてきた反面、GRRs が実証的研究の俎上に載りにくいことの一因であろう。

これらの先行研究以外にも、GRRs の 1 ないし 2 領域が SOC に及ぼす影響を検討したものが散見される (e.g., Chen, Wang, Wei, Ye, Dai, Gao, Wang, & Fu, 2019; Read, Aunola, Feldt, Leinonen, & Ruoppila, 2005) が、SOC に対する GRRs の複数の領域の効果を同時に比較した研究は、筆者らが知る限りほとんど見当たらない。しかし、元来ストレスに対処する際には、複数の GRRs が SOC によって動員されることが仮定されている点 (Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001) を考慮すると、GRRs の全領域を同時に測定し、互いに他の領域の影響を統制した上で、各 GRRs の SOC に対する独自効果を検討すべきであると思われる。以上のことから、本研究では、Antonovsky (1979) の GRRs の全 6 領域のそれぞれに相当する概念を測定可能であると思われる既存の尺度を選定し、確認的因子分析により GRRs の分類の妥当性を検証した上で、その各領域が SOC に及ぼす影響について検討する。

Antonovsky (1979) が仮定した GRRs の各領域に相当する概念と、それらに対応すると考えられる心理学的構成概念およびそれらの測定尺度を Table 1 に示した。これらの尺度は、Antonovsky (1979) が仮定した GRRs の定義に基づい

て開発されたわけではないが、以下の理由から GRRs の 6 領域に相当する構成概念を一定程度は測定可能であると考えられる。

Table 1 GRRs と対応する尺度

GRRs	説明	構成概念	対応する尺度	因子名
1. 身体的・生化学的 GRRs	ストレスに対しての遺伝的・神経免疫学的な体質	身体的 QOL	WHOQOL 26 (田崎・中根, 2007)	身体的領域
2. 物質的 GRRs	衣食住の環境, 金, 権力, 地位, 公共サービスの利用	環境的 QOL	WHOQOL 26 (田崎・中根, 2007)	環境的領域
3. 認知・感情的 GRRs	知識や知性, 知力, アイデンティティ	知性, 知力  アイデンティティ	生き方の原則調査票 (大竹他, 2005)  精神的回復力尺度 (小塩他, 2001)  多次元自我同一性尺度 (谷, 2001)	知恵と知識 勇気 人間性 節度 超越性  感情調整  自己斉一性・連続性 対目的同一性 対他的同一性 心理社会的同一性
4. 価値態度的 GRRs	合理性・柔軟性・先見性	合理性  柔軟性  先見性	情報処理スタイル尺度 (内藤他, 2004)  心の硬さ尺度 (山下・長縄, 2012)  生き方尺度 (板津, 1992)  精神的回復力尺度 (小塩他, 2001)	合理性能力 合理性態度  順応性 柔軟性・応用力 規律・規範のとらわれなさ 適度なこだわり 融通性  能動的実践態度 自己の創造・開発 自他共存 こだわりのなさ・ 執着心のなさ 他者尊重  新奇性追求 肯定的な未来志向
5. 対人関係的 GRRs	ソーシャルサポート	ソーシャルサポート	ソーシャルサポート尺度 (岩佐他, 2007)	家族のサポート 大切な人のサポート 友人のサポート
6. 社会文化的 GRRs	宗教や哲学	スピリチュアリティ	Spirituality 評定尺度 (比嘉, 2002)	自覚 意味感 意欲 深心 価値観

身体的・生化学的 GRRs は、ストレスに対する遺伝的・神経免疫学的な体質であると定義されている (Antonovsky, 1979)。World Health Organization Quality Of Life 26 (WHOQOL 26; World Health Organization, Division of Mental Health & Prevention of Substance Abuse, 1997) の日本語版 (田崎・中根, 2007) の下位尺度の一つである身体的領域は、日常生活動作や活力, 睡眠と休養など, スト

レスに対する身体的な強さを尋ねる項目群から構成されるため、当 GRRs を測定可能であると考えられる。

物質的 GRRs は、金銭やそれによって手に入れることができる健康、十分な衣食住の環境、権力や地位、公共サービスの利用可能性であると定義されている (Antonovsky, 1979)。上述した WHOQOL 26 の下位尺度の一つである環境領域は、金銭や衣食住、権力や地位、公共サービスの利用可能性などの個人を取り巻く環境の豊かさを尋ねる項目群から構成されるため、当 GRRs を測定可能であると考えられる。

認知・感情的 GRRs は、知識や知性、知力、アイデンティティであると定義されている (Antonovsky, 1979)。Values in Action Inventory of Strengths (Peterson & Seligman, 2004) の邦訳版である日本版生き方の原則調査票 (大竹・鳥井・池見・宇津木・ピーターソン・セリグマン, 2005) は、思考や感情、行動に反映される肯定的な特性を尋ねる項目群から構成されるため、当 GRRs の知性や知力といった側面を測定可能であると考えられる。また、精神的回復力尺度 (小塩・中谷・金子・長峰, 2002) の下位尺度の一つである感情調整も、感情や気分を制御しようとする姿勢やその力についての自覚を尋ねる項目群から構成されるため、同様に当 GRRs の知性や知力といった側面を測定可能であると考えられる。さらに、多次元自我同一性尺度 (谷, 2001) は、アイデンティティ確立の程度を複数の側面から尋ねる項目群から構成されるため、当 GRRs のアイデンティティの側面を測定可能であると考えられる。

価値・態度的 GRRs は、ストレスへの対処に役立つ合理性や柔軟性、先見性であると定義されている (Antonovsky, 1979)。情報処理スタイル尺度 (内藤・鈴木・坂元, 2004) の下位尺度である合理性能力と合理性態度は、論理的・分析的な思考力を尋ねる項目群から構成されるため、当 GRRs の合理性の側面を測定可能であると考えられる。また、心の硬さ尺度 (山下・長縄, 2012) は、柔軟な判断や妥協をしない性質を尋ねる項目群で構成され、柔軟性とは対極の概念であることから、当 GRRs の柔軟性の側面を測定可能であると考えられる。生き方尺度 (板津, 1992) は、主体的で創造的な生き方を尋ねる項目群で構成されるため、当 GRRs の先見性の側面を測定可能であると考えられる。また、上述した精神的回復力尺度 (小塩他, 2002) の下位尺度である新奇性追求や肯定的な未来志向も、それぞれ新しい活動に対する積極的な関わりや将来の計画を立てて具体的な見通し立てる性向を尋ねる項目群で構成されるため、同様に当 GRRs の先見性の側面を測定可能であると考えられる。

対人関係的 GRRs は、ソーシャル・サポートであると定義されている (Antonovsky, 1979)。ソーシャル・サポート尺度 (Zimet, Dahlem, Zimet, & Farley,

1988)の日本語版(岩佐・権藤・増井・稲垣・河合・大塚・小川・高山・蘭牟田・鈴木, 2007)は、家族や大切な人、友人のソーシャル・サポートとしての主観的な利用可能性を尋ねる項目群で構成されるため、当 GRRs を測定可能であると考えられる。

社会文化的 GRRs は、宗教や哲学、イデオロギーであると定義されている(Antonovsky, 1979)。Spirituality 評定尺度(比嘉, 2002)は、スピリチュアルな事柄に対する信心を尋ねる項目群で構成されるため、当 GRRs の宗教的側面を測定可能であると考えられる。

本研究では、最初にこれらの尺度群を用いた確認的因子分析によって、Antonovsky (1979)が仮定した GRRs の6領域の独立性を確認する。再現されない場合には、GRRs の因子構造について探索的に検討する。

ところで、健康生成モデルにおけるもう一つの重要な要素が SOC であり、これが強い人々はストレスにうまく対処でき、健康を保持できるという(Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001)。SOC には、人生において、①内的・外的環境から受ける刺激(ストレッサー)を予測して構造化し、説明できる自信(把握可能感)、②刺激(ストレッサー)への対処に必要なリソースを活用できる自信(処理可能感)、③刺激(ストレッサー)への対処に意味や価値を見出す感覚(有意味感)の3つの下位概念がある(Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001)。SOC は、ストレッサーやストレス反応(大鳥・福島, 2017)、抑うつ(志渡・上原・佐藤・澤目・池森・長谷川, 2012)に対して負の、精神的健康(Eriksson & Lindström, 2006; 小林・大屋・金谷, 2019)や主観的幸福感(Gabrielsen, Watten, & Ulleberg, 2013; 落合・大東・青木, 2011)に対して正の影響をそれぞれ及ぼすことが分かっている。また、SOC が強い人々は、ストレッサーを客観的に理解し、対処に向けた積極的かつ戦略的な行動をとることが可能である(嘉瀬・上野・島本・大石, 2020)。このように、SOC は健康生成論において中核的な位置を占めており、我々の心身の健康を維持するために重要な役割を果たしているとされている。SOC は GRRs によって強化されると仮定されている(Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001)ため、上述したように、GRRs の各領域が SOC に及ぼす影響について検討されてきた(Antonovsky & Sagy, 1986; Daoud, et al., 2015; 嘉瀬他, 2017; Peker, et al., 2012; Wiesmann & Hanocho, 2011)。しかしながら、いずれの先行研究においても、SOC は単一の概念として扱われており、GRRs の各領域が SOC の3つの各下位概念に及ぼす影響の違いについては、筆者らの知る限り未検討である。そこで本研究では、両者の関連を検討することによって、SOC の各下位概念の形成に特に寄与する GRRs の領域を特定する。

## 目的

本研究では、Antonovsky (1987) が仮定した GRRs の全 6 領域を上述した既存の尺度群で測定し、確認的因子分析によって GRRs の各領域の独立性を検討することで、Antonovsky (1979) による分類の妥当性を確認することに加え、GRRs の各領域が SOC の各下位概念に及ぼす影響を検討することによって、GRRs の各領域の影響を互いに統制した上で、SOC の各下位概念を強化する GRRs の領域を特定することを目的とした。

## 方法

### 分析対象者

大学生を調査対象者とした大規模データベースである CAASK<sup>3</sup> (福井・大浦・松尾, 2017) から、以下の変数が揃った197名 (女性112名, 男性85名) のデータを利用した。平均年齢は19.82歳 ( $SD=1.16$ ) であった。

### 尺度構成

#### 1. 身体的・生化学的 GRRs と物質的 GRRs

身体的・生化学的 GRRs と物質的 GRRs を測定するために、WHOQOL 26 (WHOQOL; World Health Organization, Division of Mental Health & Prevention of Substance Abuse, 1997) の日本語版 (田崎・中根, 2007) を用いた。本尺度は26項目で構成され、5 件法 (「1:まったくない~5:非常に」または「1:まったく不満~5:非常に満足」) で回答を求めた。本尺度には、身体的領域 (例, 睡眠は満足のものですか?) と心理的領域 (例, 自分自身に満足していますか?), 社会的関係 (例, 人間関係に満足していますか?), 環境領域 (例, 必要なものが買えるだけのお金を持っていますか?), 生活の全体的な質 (例, 自分の生活の質をどのように評価しますか) の 4 つの下位尺度がある。このうち、身体的領域を身体的・生化学的 GRRs の指標、環境領域を物質的 GRRs の指標としてそれぞれ用いた。

#### 2. 認知・感情的 GRRs :

認知・感情的 GRRs の知性や知力を測定するために、Values in Action Inventory of Strengths (Peterson & Seligman, 2004) の邦訳版である日本版生き方の原則調査票 (大竹他, 2005) と精神的回復力尺度 (小塩他, 2002) を用いた。前

者は、全6領域にわたる240項目の24因子で構成されているが、本研究では大竹他(2005)において因子負荷量が高かった各2項目ずつ、計48項目を用いて、5件法(「1:全くあてはまらない~5:非常にあてはまる」)で回答を求めた。本尺度には、知恵と知識(例、私は、私の友人から新しい独特のアイデアをたくさん持っていると言われる)、勇気(例、私は、苦悩や失望に打ち勝ったことがある)、人間性(例、私は、ほかの人からの愛を受け入れることができる)、正義(例、私は、グループの一員として、全力を出して働く)、節度(例、私は、いつも過去のことは過去のことで考えている)、超越性(例、私は、誰かのすばらしさに触れると涙が出そうになったことがある)の6つの下位尺度がある。このうち、正義を除いた5つの各下位尺度得点を認知・感情的GRRsの知性や知力の指標として用いた。なお、正義はチームワークや平等さ、公平さを重んじる態度を尋ねる項目群であり、認知・感情的GRRsの定義とは異なると考えられたことから、本研究では使用しなかった。後者は、21項目で構成され、5件法(「1:いいえ~5:はい」)で回答を求めた。本尺度には、新奇性追求(例、いろいろなことにチャレンジするのが好きだ)と感情調整(例、自分の感情をコントロールできる方だ)、肯定的な未来志向(例、自分の将来に希望を持っている)の3つの下位尺度がある。そのうち、感情調整の下位尺度得点を認知・感情的GRRs得点の指標として用いた。なお、新奇性追求と肯定的な未来志向は、未来に対する姿勢や態度を尋ねる項目群であり、認知・感情的GRRsの知性や知力の定義とは異なり、むしろ価値・態度的GRRsの先見性の定義に該当すると考えられたことから、価値・態度的GRRsの先見性の指標として用いた。

また、アイデンティティ確立の程度を測定するために、多次元自我同一性尺度(谷, 2001)を用いた。本尺度は20項目で構成され、7件法(「1:全くあてはまらない~7:非常にあてはまる」)で回答を求めた。本尺度には、自己斉一性・連続性(例、過去において自分をなくしてしまったように感じる(逆転項目))と対自的同一性(例、自分がどうなりたいかはっきりしている)、対他的同一性(例、自分は周囲の人に人々によく理解されていると感じる)、心理社会的同一性(例、現実の社会の中で、自分らしい生活を送れる自信がある)の4つの下位尺度がある。各下位尺度得点を認知・感情的GRRsのアイデンティティの指標として用いた。

### 3. 価値態度的GRRs:

価値態度的GRRsの合理性を測定するために、情報処理スタイル尺度(内藤他, 2004)を用いた。本尺度は38項目で構成され、5件法(「1:全くあてはまらない~5:非常にあてはまる」)で回答を求めた。本尺度には、合理性能力(例、たい

ていの人より、ものごとを論理的に解決するのが上手である)と合理性態度(例、簡単な問題より複雑な問題の方が好きだ)、直観性能力(例、自分の予感を信じることにしている)と直観性態度(例、自分の直観に頼った方がいい時があると思う)の4つの下位尺度がある。このうち、合理性能力と合理性態度の2つの各下位尺度得点を価値態度的GRRsの合理性の指標として用いた。なお、直観性能力と直観性態度は、直観的・自動的な思考や感情に基づく判断に相当し、価値態度的GRRsの定義とは異なると考えられたことから、いずれも本研究では使用しなかった。

また、柔軟性を直接的に測定する尺度が見当たらなかったため、心の硬さ尺度(山下・長縄, 2012)を用いた。本尺度は33項目で構成され、5件法(「1:まったくあてはまらない~5:非常にあてはまる」)で回答を求め、逆転して尺度得点を算出した。本尺度には、非順応性(例、感情表現が苦手なほうである)と柔軟性・応用力の欠如(例、自分の考えでも、他人の考えでもなぜそういう考えに至ったのかというプロセスを考えることがよくある)、規律・規範の尊重(例、決められたことやルールはできる限り守りたい)、過度のこだわり(例、自分が正しいと思ったことは曲げない方だ)、融通性の欠如(例、話し相手の冗談を本気でとらえてしまうことがよくある)の5つの下位尺度がある。それぞれ順に、順応性、柔軟性・応用力、規律・規範へのとらわれなさ、適度なこだわり、融通性と改名し、各下位尺度得点を価値態度的GRRsの柔軟性の指標として用いた。

さらに、先見性を測定するために、生き方尺度(板津, 1992)と精神的回復力尺度(小塩他, 2002)を用いた。前者は、28項目で構成され、5件法(「1:全くあてはまらない~5:いつもあてはまる」)で回答を求めた。本尺度には、能動的実践態度(例、努力をおしまずに、自分のできることに向かって完全燃焼する)と自己の創造・開発(例、自らを創造・開発していく)、自他共存(例、他者との関りを大事にする)、こだわりのなさ・執着心のなさ(例、過去の失敗をくよくよ後悔しない)、他者尊重(例、他人をないがしろにしない)の4つの下位尺度がある。各下位尺度得点を価値態度的GRRsの先見性の指標として用いた。また、後者について、認知・感情的GRRsの節で上述したように、新奇性追求と肯定的な未来志向の2つの下位尺度得点を価値態度的GRRsの先見性の指標として用いた。

#### 4. 対人関係的GRRs:

対人関係的GRRsのソーシャル・サポートを測定するために、ソーシャル・サポート尺度(Zimet, et al, 1988)の日本語版(岩佐他, 2007)を用いた。本尺度は12項目で構成され、7件法(「1:全くそう思わない~7:非常にそう思う」)で

回答を求めた。本尺度には、家族のサポート（例、必要なときに、家族は私の心の支えとなるよう手を差し伸べてくれる）と大切な人のサポート（例、私は喜びと悲しみを分かちあえる人がある）、友人のサポート（例、私には喜びと悲しみを分かちあえる友人がある）の3つの下位尺度がある。各下位尺度得点を対人関係的 GRRs の指標として用いた。

## 5. 社会文化的 GRRs :

社会文化的 GRRs のスピリチュアリティを測定するために、Spirituality 評定尺度（比嘉, 2002）を用いた。本尺度は15項目で構成され、5件法（「1:全く思わない~5:非常に思う」）で回答を求めた。本尺度には、自覚（例、今の自分は好きだ（自分を肯定的に評価できる）と、どの程度思いますか）と意味感（例、自分は誰かに必要とされている（誰かの役に立っている）と、どの程度思いますか）、意欲（例、自分の夢・願いを実現させたい（かなえたい）と、どの程度思いますか）、深心（例、自分と自然（宇宙）の間にはつながりがあると、どの程度思いますか）、価値観（例、自分の人生への態度（物事の見方）はこのままでよいと、どの程度思いますか）の5つの下位尺度がある。各下位尺度得点を社会文化的 GRRs の指標として用いた。

## 首尾一貫感覚 :

首尾一貫感覚を測定するために、日本版 Sense of Coherence 尺度（Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001）を用いた。本尺度は29項目で構成され、7件法（選択肢は各項目で異なる）で回答を求めた。本尺度には、把握可能感（例、あなたは、困難な問題に直面したとき、その解決法は）と処理可能感（例、これから、人生の大事な場面で困難に直面したとき、あなたはどう思うでしょうか?）、有意義感（例、今まで、あなたの人生は）の3つの下位尺度がある。各下位尺度得点とそれらの合計得点を用いた。

## 倫理的配慮

CAASK<sup>2</sup>（福井・大浦・松尾, 2017）のデータ収集においては、可能な限り所属先におけるヒトを対象とした研究に関する倫理審査の承認を受けて行われた。ただし、審査を実施する機関が存在しなかった場合には、承認に必要なのと同等の倫理的配慮の下で、調査が実施された。質問票調査は、データ収集の目的と調査への参加の任意性、データの保管方法と公表、プライバシーの保護、コース・クレジットなどについて書面で同意が得られた対象者に実施され、質問票と同意書は別々に回収された。詳細については、福井・大浦・松尾（2017）を参照

されたい。

## 分析ツール

統計分析には、HAD (清水, 2016) の version 17.105 と IBM 社の Amos Version 28 を使用した。

## 結果

### 各尺度の基礎統計量と内的整合性、性差の検討

まず、各変数の基礎統計量や内的整合性、性差の検討結果を Table 2 に示した。 $\alpha$  係数が .60 未満であった認知・感情的 GRRs の節度 ( $\alpha=.53$ ) や心理社会的同一性 ( $\alpha=.38$ )、価値態度 GRRs の柔軟性・応用力 ( $\alpha=.31$ ) や適度なこだわり ( $\alpha=.48$ ) は、以後の分析では使用しなかった。なお、価値態度 GRRs の規律・規範へのとらわれなさ ( $\alpha=.62$ )、融通性 ( $\alpha=.63$ )、こだわりのなさ・執着心のなさ ( $\alpha=.67$ ) と、社会文化的 GRRs の自覚 ( $\alpha=.58$ ) と意味感 ( $\alpha=.58$ ) の  $\alpha$  係数もやや低かったが、先行研究 (谷, 2001; 比嘉, 2002) における値とも比較した結果、本研究では許容範囲内と見なした。

$t$  検定によって性差を検討した結果、認知感情的 GRRs の人間性 ( $t(195)=2.34, p<.05$ )、価値態度的 GRRs の適度なこだわり ( $t(195)=1.89, p<.10$ ) と、対人関係的 GRRs の大切な人のサポート ( $t(195)=3.13, p<.01$ )、友人のサポート ( $t(195)=2.35, p<.05$ )、社会文化的 GRRs の意欲 ( $t(195)=2.00, p<.01$ ) について、女性の方が男性よりも有意に得点が高いことが分かった。

### GRRs の因子分析

次に、Antonovsky (1979) が仮定した GRRs の 6 領域を設定して、確認的因子分析を実施した結果、モデルに対するデータの適合度はやや悪かった ( $\chi^2(328)=832.91, p<.001, GFI=.79, AGFI=.73, CFI=.84, RMSEA=.09, AIC=1046.91, BIC=1398.21$ )。そこで、身体的・生化学的 GRRs と物質的 GRR は、それぞれ WHOQOL 26 の下位尺度である身体的領域と環境領域との間に一对一の対応があったのに加えて、相関も高かった ( $r=.61, p<.001$ ) ことから、身体・物質的 GRRs として、一つの内生変数を生成した。さらに、認知・感情的 GRRs の知恵と知識や人間性、感情調整、対自的同一性、対他的同一性、価値態度的 GRRs の合理性態度と順応性、規律・規範へのとらわれなさ、自我共存、他者尊重は、複数の内生変数からのパスが有意であり、単純構造を満たさないため削除した。さらに、GRRs の各領域に対する決定係数が .20 以下であった価値態度的 GRRs の

Table 2 各変数の基礎統計量と性差の分析結果

変数名	全体 (N=197)		男性 (N=85)		女性 (N=112)		信頼性 $\alpha$	t 値	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD			
<b>GRRs</b>									
1. 身体的・生化学的 GRRs	身体的領域 (Q)	3.36	0.62	3.37	0.61	3.35	0.63	.72	-0.28
2. 物質的 GRRs	環境領域 (Q)	3.41	0.58	3.35	0.59	3.45	0.56	.78	1.16
3. 認知・感情的 GRRs	知恵と知識 (V)	3.03	0.57	3.06	0.54	3.02	0.59	.80	-0.49
	勇気 (V)	3.00	0.59	3.03	0.55	2.98	0.62	.75	-0.53
	人間性 (V)	3.49	0.67	3.37	0.66	3.59	0.66	.78	2.34*
	節度 (V)	3.00	0.46	3.03	0.44	2.98	0.47	.53	-0.73
	超越性 (V)	3.33	0.54	3.29	0.52	3.37	0.55	.73	1.07
	感情調整 (精)	3.24	0.62	3.31	0.66	3.19	0.59	.73	-1.33
	自己斉一性・連続性 (M)	4.86	1.37	4.86	1.41	4.86	1.34	.90	-0.01
	対自的同一性 (M)	4.31	1.26	4.38	1.25	4.27	1.28	.82	-0.62
	対他的同一性 (M)	4.04	1.19	3.97	1.12	4.09	1.25	.83	0.73
	心理社会的同一性 (M)	4.33	0.78	4.31	0.75	4.34	0.81	.38	0.25
4. 価値態度的 GRRs	合理性能力 (情)	3.05	0.65	3.13	0.60	2.99	0.68	.83	-1.49
	合理性態度 (情)	3.30	0.65	3.32	0.63	3.28	0.67	.73	-0.51
	順応性 (柔)	3.29	0.95	3.29	0.91	3.29	0.98	.85	0.04
	柔軟性・応用力 (柔)	2.93	0.38	2.94	0.32	2.92	0.42	.31	-0.37
	規律・規範へのとらわれなさ (柔)	1.28	0.37	1.29	0.38	1.28	0.36	.62	-0.25
	適度なこだわり (柔)	2.73	0.64	2.63	0.65	2.81	0.63	.48	1.89†
	融通性 (柔)	3.10	0.72	3.16	0.70	3.06	0.75	.63	-0.91
	能動的実践態度 (L)	3.52	0.81	3.47	0.81	3.55	0.81	.84	0.68
	自己の創造・開発 (L)	3.46	0.74	3.45	0.71	3.47	0.77	.82	0.20
	自他共存 (L)	3.75	0.70	3.73	0.66	3.76	0.72	.81	0.34
こだわりのなさ・執着心のなさ (L)	3.09	0.73	3.08	0.68	3.10	0.78	.67	0.13	
他者尊重 (L)	3.09	0.73	3.08	0.68	3.10	0.78	.67	1.35	
新規性追求 (精)	3.70	0.73	3.63	0.72	3.75	0.74	.83	1.12	
肯定的な未来志向 (精)	3.63	0.67	3.55	0.66	3.68	0.67	.51	1.28	
5. 対人関係的 GRRs	家族のサポート (ソ)	5.45	1.27	6.11	1.68	6.67	1.67	.90	1.39
	大切な人のサポート (ソ)	3.88	1.10	5.31	1.29	5.56	1.24	.94	3.13**
	友人のサポート (ソ)	5.25	1.25	3.60	1.16	4.09	1.02	.93	2.35*
6. 社会文化的 GRRs	自覚 (S)	3.58	0.77	3.55	0.75	3.60	0.78	.58	0.50
	意味感 (S)	2.91	0.88	2.77	0.88	3.02	0.87	.58	1.32
	意欲 (S)	3.27	0.93	3.17	0.92	3.35	0.93	.81	2.00*
	深心 (S)	2.85	0.93	2.88	0.93	2.84	0.93	.83	-0.32
	価値観 (S)	3.01	0.96	3.08	0.97	2.95	0.96	.79	-0.94
<b>SOC</b>									
	把握可能感	3.81	0.67	3.86	0.68	3.78	0.66	.63	-0.78
	処理可能感	4.67	0.98	4.61	1.02	4.71	0.95	.68	1.45
	有意味感	3.98	0.66	3.90	0.58	4.03	0.71	.81	0.65
	合計	4.11	0.61	4.08	0.59	4.12	0.63	.84	0.50

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$ 

(Q) WHOQOL26

(V) 日本版生き方原則調査票

(精) 精神的回復力尺度

(M) 多次元自我同一性尺度

(情) 情報処理スタイル尺度

(柔) 心の硬さ尺度

(L) 生き方尺度

(ソ) 日本語版ソーシャル・サポート尺度

(S) Spirituality 評定尺度

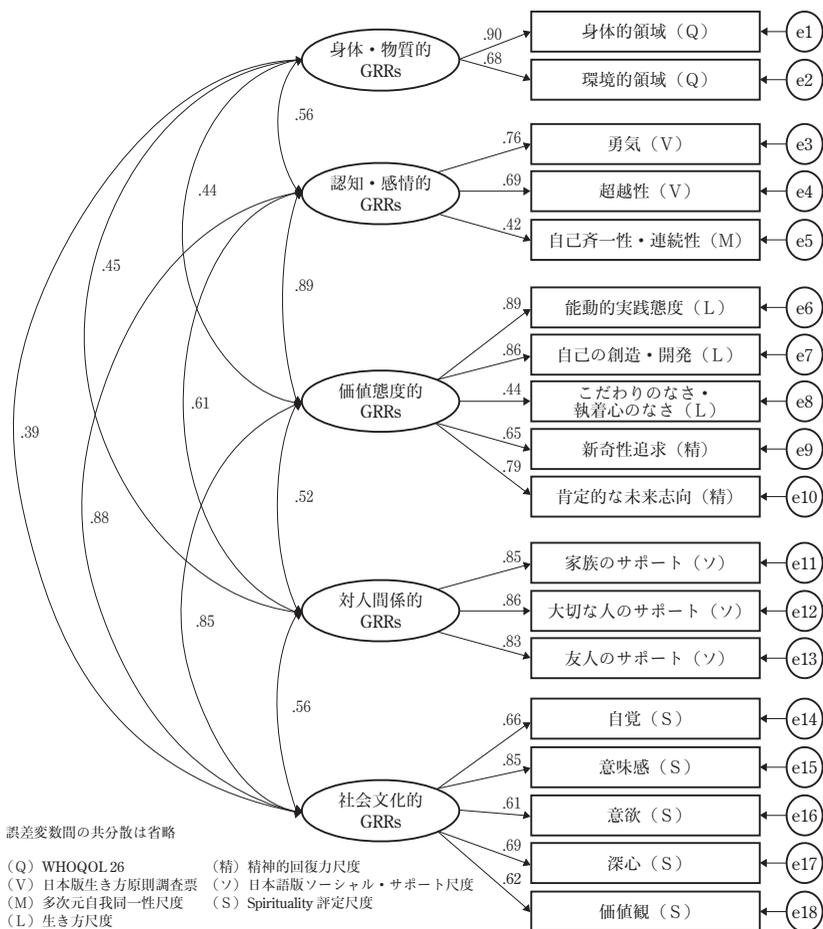


Figure 1 GRRs に対する 確認的因子分析

合理性能力や融通性もそれぞれ削除した。最終的なモデルを Figure 1 に示した。モデルに対するデータの適合度 ( $\chi^2(118)=170.50, p<.01, GFI=.91, AGFI=.88, CFI=.97, RMSEA=.05, AIC=276.50, BIC=450.51$ ) は許容される程度にまで改善した。

### GRRs と SOC の相関分析

次に、各 GRRs と SOC の各下位概念との関連を検討するために確認的因子分析で得られた GRRs の 5 領域に属する変数群と SOC の各下位尺度得点と合計得点の相関分析の結果を Table 3 に示した。その結果、認知・感情的 GRRs の超越

Table 3 GRRs と SOC の相関

GRRs の各領域	SOC			合計
	把握可能感	処理可能感	有意味感	
1. 身体・物質的 GRRs				
身体的領域 (Q)	.41***	.47***	.40***	.52***
環境的領域 (Q)	.28***	.37***	.31***	.39***
2. 認知・感情的 GRRs				
勇気 (V)	.28***	.46***	.55***	.53***
超越性 (V)	.11	.34***	.53***	.40***
自己斉一性・連続性 (M)	.27***	.57***	.54***	.56***
3. 価値態度的 GRRs				
能動的実践態度 (L)	.32***	.55***	.71***	.65***
自己の創造・開発 (L)	.30***	.57***	.71***	.65***
こだわりのなさ・執着心のなさ (L)	.48***	.57***	.48***	.62***
新奇性追求 (精)	.24***	.57***	.60***	.58***
肯定的な未来志向 (精)	.30***	.55***	.71***	.64***
4. 対人関係的 GRRs				
家族のサポート (ソ)	.16*	.47***	.42***	.43***
大切な人のサポート (ソ)	.20**	.47***	.40***	.43***
友人のサポート (ソ)	.15*	.49***	.46***	.45***
5. 社会文化的 GRRs				
自覚 (S)	.14*	.37***	.55***	.44***
意味感 (S)	.26***	.35***	.45***	.43***
意欲 (S)	.29***	.47***	.63***	.57***
深心 (S)	.40***	.49***	.56***	.59***
価値観 (S)	.31***	.44***	.45***	.49***

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

(L) 生き方尺度  
(Q) WHOQOL26  
(V) 日本版生き方原則調査票  
(M) 多次元自我同一性尺度  
(L) 生き方尺度  
(精) 精神的回復力尺度  
(ソ) 日本語版ソーシャル・サポート尺度  
(S) Spirituality 評定尺度

性を除く GRRs の全尺度得点は、SOC の全尺度得点との間に弱い～やや強い有意な正の相関を示すことが分かった。

### GRRs の各領域が SOC の各下位概念に及ぼす影響

さらに、GRRs の 5 領域が SOC の各下位尺度得点に及ぼす影響を構造方程式モデリングにより検討した。なお SOC は、把握可能感と処理可能感、有意味感からなる、健康生成論で仮定された 3 因子モデル (Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001) 以外に、把握可能感と処理可能感をまとめた把握・処理可能感と有意味感からなる 2 因子モデル (銅直, 2019) が想定されている。そこで、本研究では、GRRs の 5 領域が SOC の 3 因子と 2 因子に及ぼす影響を示す 2 つのモデルを比較した。その際、把握可能感の属する因子である項目 3 「とても親しく感じる人びと以外で、あなたが毎日接する人たちのことを考えてください。あな

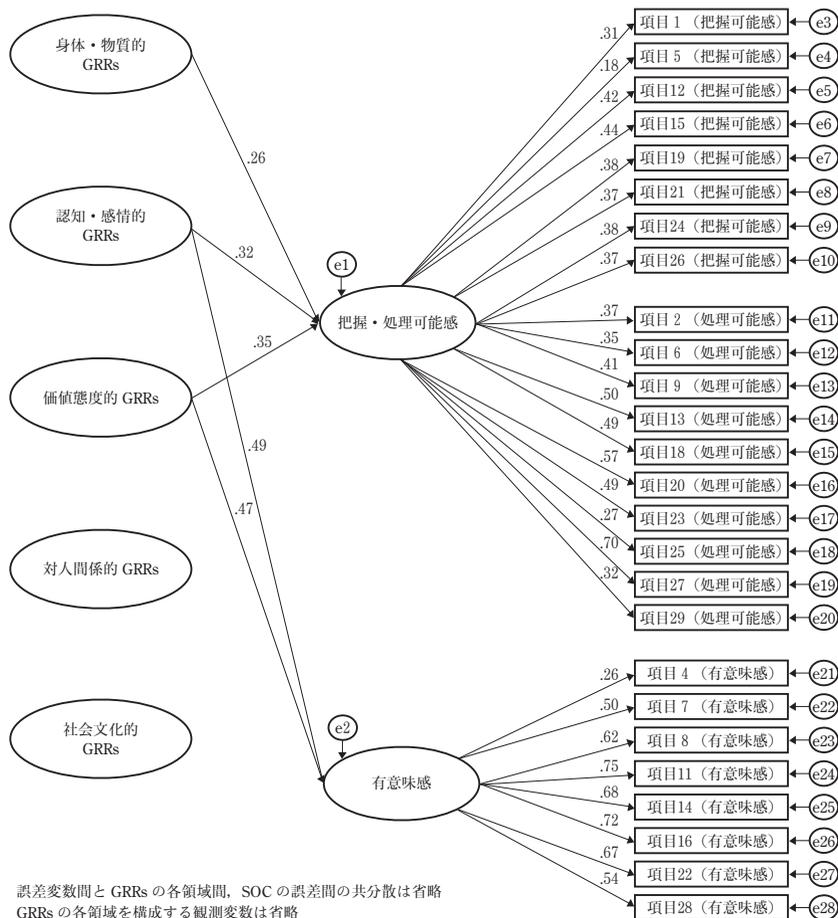


Figure 2 GRRsがSOCの2因子に及ぼす影響

たは、その人たちのことをどれほどよく知っていますか？ (1. 知らない人のように感じる～7. とてもよく知っている)」、項目10「過去10年間のあなたの人生は (1. 次に何が起こるかかわからない出来事ばかりだった～7. 見通しのきいたものだった)」、項目17「将来のあなたは、たぶん、(1. 次に何が起こるのかかわからない出来事ばかりだろう～7. 見通しのきいたものになるだろう)」に対するパスが有意でなかったため削除した。その結果、前者 ( $\chi^2(849)=1431.38, p<.001, GFI=.78, AGFI=.72, CFI=.85, RMSEA=.06, AIC=1713.38, BIC=2176.31$ ) の方が後者 ( $\chi^2(837)=1327.50, p<.001, GFI=.77, AGFI=.73, CFI=.87, RMSEA=.06, AIC=1633.50, BIC=2135.83$ ) よりも適合度が悪かったため、後者を採用し、Figure 2に示した。身体・物質的 GRRs ( $\beta=.26, p<.01$ ) と認知・感情的

GRRs ( $\beta=.32, p<.05$ ), 価値態度的 GRRs ( $\beta=.35, p<.05$ ) は把握・処理可能感を, 認知・感情的 GRRs ( $\beta=.49, p<.05$ ) と価値態度的 GRRs ( $\beta=.47, p<.05$ ) は有意味感をそれぞれ促進することが分かった。それに対して, 対人関係の GRRs と社会文化的 GRRs から SOC の各下位尺度に対するパスは有意ではなかった。

## 考察

本研究の目的は, Antonovsky (1979) が仮定した GRRs の 6 領域を既存の尺度で測定し, 因子分析によってその分類の妥当性を検討することと, GRRs の各領域が SOC の各下位概念におよぼす影響を検討することであった。

### 健康生成論における GRRs の分類の妥当性

まず, Antonovsky (1979) が仮定した 6 領域の GRRs に相当する変数群に対して確認的因子分析を試みたが, データのモデルに対する適合度はやや不十分であり, 分類の妥当性に疑問が残った。ただし, 身体的・生化学的 GRRs と物質的 GRRs を身体・物質的 GRRs としてまとめ, パス係数が低かった変数群や単純構造を満たさなかった変数群を削除した 5 領域モデルの適合度は良好であった。このことから, Antonovsky (1979) の分類について, 一定の妥当性が確認されたと言える。身体的・生化学的 GRRs と物質的 GRRs は, 同一尺度の下位尺度を用いたことから, 識別性が低くなった可能性もある。ただし, いずれも心理学的な構成概念ではないという共通点があるため, これら 2 つの GRRs を明確に弁別して独自の影響を検討する積極的な必要性は低いと考えられる。検討したい内容によって, 合算してもよいし, 別々に用いても支障はないだろう。

因子分析の過程で, 複数の GRRs からのパスが有意であったために削除された変数群については, GRRs の複数の領域にまたがる項目内容を含んでいたことが原因であると思われる。削除された全ての変数については紙幅の都合で言及しないが, 例えば, 認知・感情的 GRRs の知性や知力を測定するのに使用した知恵と知識では「必要に応じて, 私は非常に合理的に考えることができる」といった価値態度的 GRRs の合理性の方が内容的に近い項目や, 認知・感情的 GRRs のアイデンティティを測定するのに使用した対自的同一性では「自分がどうなりたいかははっきりしている」といった価値態度的 GRRs の先見性に相当する項目, 対他的同一性では「自分は周囲の人々によく理解されている」といった対人関係の GRRs に相当する項目がそれぞれ含まれていた。このことから, 単純構造を満たさなかったことで除外された変数があることは, Antonovsky (1979) による

GRRs の分類に論理的な誤謬があったと言うよりも、これらの概念を直接的に測定することを目指して開発されたわけではない既存の尺度を用いたことによる技術的なエラーであったと見なす方が自然である。将来的には、GRRs の各領域の測定を既存の尺度で代替するのではなく、直接的に各領域を他の領域と識別して測定可能な尺度を開発する必要があるだろう。

また、パス係数や決定係数が低かった合理性能力と融通性が削除されたこれにより、価値態度的 GRRs から合理性と柔軟性の側面が抜けてしまった。このことは、こうした合理性や柔軟性という概念自体が、Antonovsky (1979) の分類による価値態度的 GRRs の下位概念としては、他の側面とやや質の異なる独立性の高い概念であった可能性を示唆している。合理性と融通性を価値態度的 GRRs から独立した別の領域と捉えることの妥当性については、議論の余地があるため、本研究では合理性と柔軟性を独立させたモデルについては検討していないが、今後は各 GRRs の内容の構成とその測定尺度について再検討が必要だろう。

### GRRs の各領域が SOC の各下位概念に及ぼす影響

構造方程式モデリングによって、SOC の各下位概念に対する GRRs の領域別の効果を検討した結果、GRRs のいくつかの領域が SOC の各下位概念に異なる影響を及ぼすことが分かった。相関分析では、ほとんど全ての GRRs が SOC と正の相関を示すことが分かったにもかかわらず、身体・物質的 GRRs といった GRRs の物理的・環境的な側面は、把握・処理可能感のみを促進して、有意味感を促進しなかったのに対して、認知・感情的 GRRs や価値態度的 GRRs といった心理的な GRRs はどちらをも促進することが分かった。前者は心理的な資質や特性ではなく、物理的な身体の強さや環境内において利用可能な資源であるため、ストレスへの対処には役立つ資源ではあるが、その対処に意味を感じることに寄与しないのは、妥当な結果であると考えられる。さらに、認知・感情的 GRRs や価値態度的 GRRs が SOC のいずれの側面の形成や強化にも寄与することは、両者が GRRs の中でもストレスへの対処に役立つ情報や知性と行動計画的な戦略に相当する (Antonovsky, 1979) という定義に鑑みても、妥当な結果であると考えられる。一方で、対人関係的 GRRs と社会文化的 GRRs から SOC の各下位概念に対する有意なパスは確認されなかった。上述したように、GRRs としてのソーシャル・サポートが SOC の強化因子であること (e.g., Antonovsky & Sagy, 1986; Peker, et al., 2012) や、その他の研究では GRRs として扱われたわけではないがスピリチュアリティも SOC の形成や強化に寄与すること (室谷・比嘉・田中・山田, 2016) が示されているが、こうした知見は GRRs の他の領域の影響を互いに統制しなかったせいで生じた偽相関であった可能性がある。

本研究から、GRRsの各領域を同時に測定することで、真にSOCの形成に寄与するGRRsの領域を特定するのに役立つ検討方法を提案できたことには一定の意義があると言える。本研究から、SOCによりGRRsが動員されてストレスラーに対処することで心身の健康が維持・増進されるという健康生成モデル(Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001)を検討する際には、効果を検討したいGRRsの領域以外の領域の影響も同時に測定し、互いに他の影響を統制し合った上で、GRRsの当該領域の独自効果を検討する必要があることが示唆された。

### 本研究の限界と今後の課題

まず、本研究で設定したGRRsがSOCを説明するモデルに対するデータの適合度が悪かった点が大きな問題点として残る。GRRsの因子分析の部分では良好な適合度が得られたことから、低い適合度の原因がSOCの2次元モデルにあることは明白である。SOCの各下位概念は、健康生成論において理論的には区別されているものの、「手がつけられないほど絡み合っ」ており、下位尺度別の検討は推奨されていない(Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001; Antonovsky, 1993)。これは、SOC尺度の項目生成にファセット・アプローチが用いられたことが原因であるとされている(戸ヶ里, 2017)。詳細は成書(Antonovsky, 1979; Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001)に譲るが、本来であれば243項目(いずれも3水準からなる刺激の性質×刺激の源×刺激が課す要求×刺激の時間×刺激に対するSOCの構成要素)が必要とされるはずのものを29項目に縮約したため、因子分析の際に1つのファセットに過ぎない刺激に対するSOCの構成要素(把握可能感, 処理可能感, 有意味感)の次元だけでは適切に分解できないとされているのである(Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001)。実際、Antonovsky(1993)も探索的因子分析で明確な因子構造を示すことに失敗しており、その後の因子分析研究では、Antonovskyが提案した上位1因子の下に3つの下位因子がある2次3因子構造が確認されてきた(e.g., Eriksson, & Lindström, 2005; Feldt, Leskinen, Kinnunen, & Ruoppila, 2003; 戸ヶ里・山崎, 2005; Togari, Yamazaki, Nakayama, Yamaki, & Takayama, 2008)。本研究では、GRRsの各領域がSOCの各下位概念に及ぼす影響が検討の焦点であったため、2因子モデルを採択せざるを得なかった。今後、SOC尺度の因子構造を再検討した上で、SOCに対するGRRsの各領域の独自の効果を再検討する必要があるだろう。

次に、GRRsの各領域を測定するはずの変数がモデルから多く削除されたため、GRRsの各領域の全ての側面をモデルに含めた検討が不可能であった点が挙げられる。上述したように、既製の尺度にGRRsの各領域にまたがる内容を問う項目が含まれていたせいであると考えられる。今後は、Antonovskyの理論的前提を

厳密に反映し、異なる領域とは明確に識別できる項目のみを用いた GRRs の測度を開発して、SOC の各下位概念に及ぼす影響を再検討する必要がある。

また、本研究では、GRRs の各領域が SOC の各下位概念に及ぼす影響を線型モデルにより検討したが、健康生成論においては、GRRs の複数の領域が動員されてストレスラーに対処することが仮定されている (Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001) ことから、GRRs の各領域の交絡関係についても検討する必要がある。健康生成論では GRRs の全領域が SOC の形成や発達に寄与することが仮定されている (Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001) ことから、本研究で有意な寄与が見られなかった対人関係的 GRRs と社会文化的 GRRs は、他の GRRs の調整変数として機能する可能性もある。あるいは、クラス分析などの非線形モデルにより、SOC の強化に寄与する GRRs の領域の組み合わせが存在する可能性についても検討の余地があるだろう。

最後に、本研究では、GRRs が SOC を直接的に強化するという観点でモデルを構築したが、健康生成論 (Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001) では、SOC は豊富な GRRs の存在によって提供される良質な人生経験を通じて学習され形成されると言う。本研究では、そのような良質な人生経験を心理学的構成概念としてモデルに組み込んでいないため、GRRs のいくつかの領域で SOC への直接的寄与が示されなかったのは、単に良質な人生経験がその効果を直接的に媒介するためなのかもしれない。いずれにせよ、健康生成理論は非常に複雑な理論であり、実証的研究の俎上に載せることが難しい面も多々あるため、本研究のような試みが、同理論についてのエビデンスの蓄積に貢献することが期待される。

## 附記

本稿は、第62回日本心身医学会近畿地方会において発表された「汎抵抗資源の実証的分類の試み」(今井田・福井, 2019) を再分析し、論文化したものである。

また、本稿では今井田・大浦・松尾・福井 (2016a, b, 2017a-i, 2018a-c) や Imaida, Oura, Matsuo & Fukui (2017), 今井田・福井 (2017, 2018a, b, 2019a-d), 今井田・今井田・福井 (2019) による学会発表と一部データの重複があるが、これらは本稿の内容とは関係ないため、引用文献リストからは割愛した。

なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 引用文献

Antonovsky, A. (1979) *Health, stress, and coping*. New Jersey: Jossey-Bass Publishers.

Antonovsky, A. (1987) *Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well*. New Jersey: Jossey-Bass Publishers. (山崎喜比古・吉井清子監訳 (2001) 健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム. 有信堂高文社.)

- Antonovsky, A. (1993) The structure and properties of the sense of coherence. *Social Science & Medicine*, **36**(6), 725-733.
- Antonovsky, H., & Sagy, S. (1986) The development of a sense of coherence and its impact on responses to stress situations. *The Journal of Social Psychology*, **126**(2), 213-225.
- Chen, H., Wang, L., Wei, Y., Ye, B., Dai, J., Gao, J., Wang, F & Fu, H. (2019). The potential psychological mechanism of subjective well-being in migrant workers: A structural equation models analysis. *International journal of environmental research and public health*, **16**(12), 2229. doi: <https://doi.org/10.3390/ijerph16122229>
- Daoud, N., Berger-Polsky, A., Abu-Kaf, S., & Sagy, S. (2020) Sense of coherence among Bedouin women in polygamous marriages compared to women in monogamous marriages. *Women Health*, **60**(1), 43-59.
- 銅直 優子 (2019) 首尾一貫感覚の形成に関連する要因について. 流通科学大学論集, **31**(2), 77-86.
- Eriksson, M., & Lindström, B. (2005) Validity of Antonovsky's sense of coherence scale: a systematic review. *Journal of Epidemiology & Community Health*, **59**(6), 460-466.
- Eriksson, M., & Lindström, B. (2006) Antonovsky's sense of coherence scale and the relation with health: A systematic review. *Journal of Epidemiology Community Health*, **60**(5), 376-381.
- Feldt, T., Leskinen, E., Kinnunen, U., & Ruoppila, I. (2003) The stability of sense of coherence: Comparing two age groups in a 5-year follow-up study. *Personality and individual differences*, **35**(5), 1151-1165.
- 福井 義一・大浦 真一・松尾 和弥 (2017) 被虐待経験と不安定愛着が情動調整不全を介して心身の不健康や不適応に及ぼす影響—青年期を対象とした大規模調査 CAASK<sup>2</sup> の概要—. 甲南大学紀要文学編, 167, 71-94.
- Gabrielsen, L.E., Watten, R.G., & Ulleberg, P. (2013) Differences on adolescent life goal profile scale between a clinical and non-clinical adolescent sample. *International Journal of Psychiatry in Clinical Practice*, **17**(4), 244-252.
- 比嘉 勇人 (2002) Spirituality 評定尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討. 日本看護科学会誌, **22**, 29-38.
- 朴峠 周子 (2014) 健康生成論における健康の科学. 第18回日本心身健康科学会学術集会シンポジウム. 心身健康科学, **10**, 72-74.
- 今井田 貴裕・福井 義一 (2019) 汎抵抗資源の実証的分類の試み. 第62回日本心身医学会近畿地方会ならびに第49回近畿地区講習会プログラム・抄録集, 26.
- 板津 祐己 (1992) 生き方の研究—尺度構成と自己態度とのかかわりについて—. カウンセリング研究, **25**, 85-93.
- 岩佐 一・権藤 恭之・増井 幸恵・稲垣 宏樹・河合 千恵子・大塚 理加・小川 まどか・

## 投稿論文

- 高山 緑・蘭牟田 洋美・鈴木 隆雄 (2007) 日本語版「ソーシャル・サポート尺度」の信頼性ならびに妥当性—中高年を対象とした検討—, 厚生 の 指 標, **54**, 26-33.
- 嘉瀬 貴祥・上野 雄己・大石 和男 (2017) パーソナリティ・プロトタイプに基づいた大 学 生 の 類 型 化 と 精 神 的 健 康 の 関 連, 日 本 健 康 教 育 学 会 誌, **25(3)**, 195-203.
- 嘉瀬 貴祥・上野 雄己・島本 好平・大石 和男 (2020) 高い Sense of Coherence を持つ 者 の 日 常 生 活 に お け る 問 題 へ の 対 処 に か か わ る 行 動 や 思 考 の 特 徴 — 計 量 テ キ ス ト 分 析 に よ る 質 的 検 討 —, ス ト レ ス 科 学 研 究, **35**, 21-31.
- 小林 涼香・大屋 愛里・金谷 光子 (2019) 看護学生における実習中の精神健康度 (GHQ 28) と ス ト レ ス 対 処 能 力 (SOC) の 現 状, 新 潟 医 療 福 祉 学 会 誌, **19(1)**, 93-93.
- 室谷 寛・比嘉 勇人・田中 いずみ・山田 恵子 (2016) 看護師の首尾一貫感覚に私的スピ リ ュ ア リ ティ お よ び 二 次 元 レ ジ リ エ ン ス 要 因 が 及 ぼ す 影 響, 富 山 大 学 看 護 学 会 誌, **15(2)**, 137-143.
- 内藤 まゆみ・鈴木 佳苗・坂元 章 (2004) 情報処理スタイル(合理性—直観性)尺度の作 成, パーソナリティ研究, **13(1)**, 67-78.
- 落合 龍史・大東 俊一・青木 清 (2011) 大学生における SOC 及びライフスタイルと主観 的 健 康 感 と の 関 係, 心 身 健 康 科 学, **7(2)**, 91-96.
- 小塩 真司・中谷 素之・金子 一史・長峰 伸治 (2002) ネガティブな出来事からの立ち直 り を 導 く 心 理 的 特 性 — 精 神 的 回 復 力 尺 度 の 作 成 —, カ ウ ン セ リ ン グ 研 究, **35**, 57-65.
- 大竹 恵子・島井 哲志・池見 陽・宇津木 成介・Christopher Peterson・Martin E.P. Selig- man (2005) 日本版生き方の原則調査票(VIA-IS: Values in Action Inventory of Strengths)作成の試み, 心理学研究, **76(5)**, 461-467.
- 大島 和子・福島 和代 (2017) 看護大学生の職業志望動機とストレス, 心身健康科学, **13 (2)**, 62-71.
- Peker, K., Bermek, G., & Uysal, O. (2012) Factors related to sense of coherence among den- tal students at Istanbul university. *Journal of Dental Education*, **76(6)**, 774-782.
- Peterson, C., & Seligman, M.E.P. (2004) *Character strengths and virtues: A handbook and classification*. American Psychological Association; New York : Oxford University Press.
- Read, S., Aunola, K., Feldt, T., Leinonen, R., & Ruoppila, I. (2005) The relationship between generalized resistance resources, sense of coherence, and health among Finnish peo- ple aged 65-69. *European Psychologist*, **10(3)**, 244-253.
- 佐々木 新・島田 修 (2000) 大学生におけるソーシャル・サポートの互恵性と自尊心との 関 係, 川 崎 医 療 福 祉 学 会 誌, **10(2)**, 249-254.
- 志渡 晃一・上原 尚紘・佐藤 厳光・澤目 亜希・池森 康裕・長谷川 聡 (2012) 首尾一貫 感 覚 (SOC) と 抑 う つ 症 状 と の 関 連 — 医 療 系 大 学 に 所 属 す る 学 生 を 対 象 と し て —, 北 海 道 医 療 大 学 看 護 福 祉 学 部 紀 要, **19**, 75-79.

- 谷 冬彦 (2001) 青年期における同一性の感覚の構造—多次元同一性尺度 (MEIS) の作成—, 教育心理学研究, **49**, 265-273.
- 田崎 美弥子・中根 允文 (2007) WHOQOL 26 手引き改訂版. 金子書房.
- 戸ヶ里 泰典 (2017) SOC スケールの使い方. (山崎喜比古 (監修)・戸ヶ里泰典 (編) 健康生成力 SOC と人生・社会—全国代表サンプル調査と分析. 第2章. pp.43-61. 有信堂.)
- 戸ヶ里 泰典・山崎 喜比古 (2005) 13項目5件法版 Sense of Coherence Scale の信頼性と因子的妥当性の検討. 民族衛生, **71**(4), 168-182.
- Togari, T., Yamazaki, Y., Nakayama, K., Yamaki, C.K., & Takayama, T.S. (2008). Construct validity of Antonovsky's sense of coherence scale: Stability of factor structure and predictive validity with regard to the well-being of Japanese undergraduate students from two-year follow-up data. *Japanese Journal of Health and Human Ecology*, **74**(2), 71-86.
- Wiesmann, U., & Hannich, H.J. (2011) Salutogenic perspectives on health maintenance: The role of resistance resources and meaningfulness. *The Journal of Gerontopsychology and Geriatric Psychiatry*, **24**(3), 127-135.
- World Health Organization. Division of Mental Health and Prevention of Substance Abuse. (1997) *WHOQOL : Measuring quality of life*. Geneva: World Health Organization. Retrieved from [http://www.who.int/mental\\_health/media/68.pdf](http://www.who.int/mental_health/media/68.pdf) (August, 30, 2021)
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面. 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- 山下 利之・長縄 久生 (2012) 心の硬さの測定とその応用. 知能と情報, **24**, 827-835.
- Zimet, G.D., Dahlem, N.W., Zimet, S.G., & Farley, G.K. (1988) The multidimensional scale of perceived social support. *Journal of Personality Assessment*, **52**(1), 30-41.